２００５年　２月２０日発行　Alcoholics Anonymous　（1）

171-0014東京都豊島区池袋４－１７－１０　土屋ビル４Ｆ

AA 日本ニューズレター No.110

「常任理事を退任するにあたり－贈る言葉－」

前Ａ類常任理事　田　辺　　等（精神科医・北海道立精神保健福祉センター）

久里浜病院にいた岡崎さん（現さいたま市こころの健康センター）の後任のＡ類常任理事として、５年勤めました。2年ごとの更新で３期までというお話もありましたが、予定を１年早めて退任します。

アメリカではノンアルコホーリクの理事は、常任理事会のchairman をしているなどと聞かされていましたが、そこまでの関りはやはり無理でした。やっぱりゼネラルサービスオフィスに２０人ほどのスタッフが雇用されている国、「夏休みは、ちょっとオーストラリアで２ヶ月ほどステイする」などと言うリッチな国の話とは違います。

それでも最初は札幌から年に５回、会議に出ました。最近は予算の問題もあって、会議が減りましたが。私は遠方、苦しい予算の足を引っ張るほうであったかもしれません。

しかし自分の場合、忙しい中で、ＡＡの会議の討議事項を把握するのに、結局のところ効率がよいのは会議に出ることでした。その場で確認しながら意見を聞き、しかも同時に相手の表情や声の調子を直に感じ取り、場の全体の空気を読んで頭に入れるタイプなのです。自分は集団精神療法家であるからなのかもしれませんが。

ｅ-メイルでの意見交換は迅速で便利ですが、大きな濃密な議題には向かず、同時性を共有できなかったりするので、何かともどかしいところがあります。最近は、どこもかしこも節約のために、メイリングリストの会議ばかり。毎日、３種類くらいから１０数通も入ってくることがあります。疲れた時には、正直、開封恐怖症気味になり、返事が送れたこともしばしばでてきました。

こういうことも、“選手交替”を早めていただいた理由の１つですが、本当のところは、３０周年の際に、Ａ類理事が多いほうが良いと考えたことが一番の理由です。私は２５周年のとき、前任の岡崎さんに大いに助けていただきましたから。30 周年のときは、私も前任として何らかの支えをしたいと思っています。

二番目の理由は、ＮＰＯなどの面でも、公務員には制約が多く、十分な協力がしにくいからです。もっと自由な立場の方のほうがよいと思いました。

私も、これまで会議の議論には、時に冷静に、殆どは熱く、みなさんと同じ目線で参加してきました。日本のＡＡは、今はまだ大いにディスカッションが必要と思います。

ただ私は、今回の退任にあたって、最近考えたことを最後にお伝えしようと思います。

１つは寛容ということです。日本のＡＡのサービス事業は、まだまだ poor な環境の中で、精一杯のことを目指していると思います。このような事業体制で活動できているのは、なかなかだと思います。私が驚いたことの１つに、常任理事会や評議会に集るみなさんの高い能力でした。飲んでないアルコホーリクの力量はたいしたものです。これを空回りさせているのは、些細なミスを攻撃し続け、限りあるエネルギーを空転させる不寛容さです。

二つ目は、「全体のしもべ」の理解です。

ＡＡは、逆３角形のピラミッドなどと言われます。代議員、評議員、理事会等、私も十分な規約を知らないのですが、国の政治になぞらえ、内閣のようなところにいたことになるのかと錯覚しがちです。特に、私のような５０代の年齢では、民主主義という言葉には、いろいろな思いや体験があります。評議会での議論は、高校の生徒会をほうふつとさせるものでした。しかし、ここでの民主的ということに違和感を持つことがありました。考えてほしいと思います。

例えば「私のグループでは聞いてない」「全員に浸透していない」「まだみんなのものになっていない」などの考えは、会員制組織が組織決定を積み上げていくプロセスの理解に思えてなりません。まるで、ＡＡが入会性の組織や結社のように疑われても仕方ありません。

ＡＡの基本は、まだ苦しんでいるアルコホーリクに伝える１２番目のステップによって、新たなアルコホーリクの仲間が１番目のステップを踏み出すことだと思います。

今、苦しんでいて右も左もない、あるいは周囲をみわたして半信半疑の目で、体を振るわせながら会場の椅子に座っている人にたいしては、

「酒をやめたいということだけで良いんですよ。あなたは、それ以外の心配はしなくていいんだよ。会費もいらない。会場費もダイジョーブ。何の規則も義務もない。安心して、お酒の問題に取り組んでください。あなたが、それに専念できるように、先行く仲間が話しあっていろいろなことを手分けして、このミーティングができているのですからー。」

というメッセージがＡＡの本質ではないでしょうか。「全体のしもべ」というのは、周囲に配慮ができるようになった人が、意を汲んで動くという意味かと思います。

グループ全員の意志を多数決で確認してくることが重要で、それができてない段階は不完全な過程である、というのは余りに強迫的すぎます。現実的でないばかりか、完全な縦型組織のようなとらわれができてしまう。

本当に、サービス活動が必要だと思っている方が集り、ＡＡを良く知らない人のことも考えて用意し行動する。シラフ

になりソーバーが続き、ふと「自分が読んでいるボックス９１６って、誰が作ってくれているのかな」と考えだした人からで良いと思います。

私は５年をふりかえって、十分な貢献ができたかどうかがわかりません。

しかし、いろいろな体験ができ、思い出になりました。

Ｂ＆Ｇでの毎年２月の３日間の熱い討論。韓国の方が訪れて、拙著をあげたこと。

２５周年のシンポジウムで来日した米国のＡ類常任理事が、あの有名な Dr. Vaillant さんであったこと。ニューヨークのＧＳＯに行ってみたこと。

岡崎さんや平野さんや佐古さんとも知り合いになれたこと。

中断しかけたサーベイランスを復活してもらったこと。

病院施設向けの広報フォーラムで発言したこと。そのために宇都宮と広島に行ったこと。おかげで酒も飲まずにギョーザを食べたり、パフエを食べたりできたこと。

そのような中で、ニューズレターやフォーラムでは、多少なりとも自分のＡＡに対する考えや気持を表現できました。歴史的な振り返りや理論づけにも挑戦してみました。私なりに理事として体験した５年に本当に悔いはありません。30 周年で再会しましょうね。

第１０回評議会が２月１１日～１３日に渡り、神奈川県川崎市の川崎グランドホテルにおいて開催されました。

前日の常任理事会で全体サービス常任理事、荒井さんからの一身上の都合による辞任願いを受理したことで７名の常任理事、２名のＷＳＭ評議員、３名のＪＳＯスタッフと東北地域前期評議員が欠席で１９名の評議員で構成される全国評議会となりました。多くのボランティアが集まってくれた書記局と事務局の手助けを得て、長時間に及ぶ熱い討議を交わしました。ＧＳＭ（ゼネラルサービスミーティング）から数えると１６回になり、日本の全体サービスもその骨格はかなり固まってきたと思われます。しかし、昨年のテーマであった「愛とサービスの輪」の広がりはなかなか思うようにはいかない現実の中、様々なサービスシステムのきしみや不合理性が議題として取り上げられました。この日本ニューズレター最後のページに掲載された改革小委員会の設置や今年のテーマとなった「一体性」をさらにＡＡの大きな目的に向けて、全てのメンバーの力が集まってゆくように願っています。

ＡＡの愛とサービスの輪
～北海道～

ＡＡのサービス活動からもらったもの

ナオキ(浦河うしおG)

こんにちは。アルコホーリクのナオキといいます。サービスについてというような話で原稿依頼を頂きまして、特別熱心にサービスをやってきたわけではないですが、ニューズレターなんて滅多にない機会という理由もあってＯＫしたので、思いつくままに書かせて頂きます。

僕は最初に札幌のあるグループにつながることができました。そこは今思えば大変恵まれたグループで、数多くのメンバーがすすんで協力してミーティングを維持しているという雰囲気があったように思います。当時僕がＡＡに顔を出していた理由は、精神科の主治医に、ＡＡなんていうところに行っても意味がないという報告をするため、しぶしぶ何回か行ってやろうというものでしたが、そうとでも思わないとプライドの塊の自分が納得しなかったのかもしれません。どうせ自分の場合はダメだろうと思い、人間関係にも絶望していたので人の集まりに行くのが嫌でたまりませんでした。

そんな僕がカレンダーに印をつけるのをやめ（３０回くらいでやめるためにつけてました）、気がついたら、生まれてはじめて助けられたと感動し、僕は「仲間」の一人かもしれないと思うようになっていました。絶対にやらないだろうと思っていた仲間とのコップ洗いや、バス停での仲間とのたわいもない会話、仲間との別れ際に手を振っている自分には驚きました。今考えても奇跡ですね、自分がどんなに否定しようが知らないうちにミーティング場から希望をもらい、信じる気持ちが芽生えていたと思います。時間通りにミーティングが始まり、大体いつも決まったメンバーが顔をそろえ、大体ローテーションどおりに決まった人が司会をし、ミーティング前後の和気あいあいとした雰囲気、コップを何人かで洗ったり後片付けをしているといった一見たわいもないことが維持されていることが、これはある程度マトモなところかもしれない、ある程度続けてもいいところかもしれない、と思うのに重要な部分のひとつだった気がします。

そしてソーバー3ケ月の時に会場係というのをやることになったのがサービス経験の最初でした。ビジネスミーティングでそれが決まった時は不満を表明しましたが、じつはこれは僕の素直でないところで、スンナリやらせてもらいますと言えないんです。本当はやりたかったんですが、謙虚に見せたいとか計算があり、やはり自分から言うよりはみんなからやってほしいといわれたほうが気分がいい、そんな思いをみんな知ってか知らずか、やらせてもらうことになりました。お湯を沸かしたりする役割でしたが、飲んでたときは周りから相手にされなくなり、どんな小さなことも出る幕がないという感じだったので、ＡＡでお湯沸ししてる時も、お前はひっこんでろとか言われるんじやないかと心配でしたが、誰もそんなことを言わなかったのがとてもうれしかったです。

ただ僕は、自分よりあとからＡＡにつながってくる仲間に関わるのはいやでした。僕は当時２９歳でつながったので、

後からつながってくる仲間のほとんどは年上であり、社会経験や人生経験も圧倒的に違うと気後れしていましたが、自分が先に来ているんだから彼らより回復してると思われたい、バカにされたくないという思いがありました。ビジネスミーティングでちょっといざこざがあるともう大嫌いになり、他の仲間に悪口を言いふらしたりもしました。みんな味方になってくれれば安心できると思いました。しかし、それはお前の問題だ、と言われるばかりで、今思えば全くその通りなんですが当時は納得できませんでした。グループで自分だけが大事にされたい、自分の悩みが最重要で、悲劇のヒーローで同情を集めたい、そのくせ後からきた仲間が仕事についたりすると心中穏やかではなく、一生懸命あら探しをしました。僕がＡＡにつながるときにしてもらったことが、自分は全く大事にできず他の仲間に対して出来ない、やろうとしない、ただやってもらっただけでした。そんな自分もスポンサーに導かれる形でステップ４、５をやらせてもらいましたが、そのあと浦河という小さな町に半ば逃げるような形で移り住みました。

ホームＧが浦河Ｇになりました。そこでは毎年宿泊形式のセミナーを開催しており、僕もそれに毎年関わらせてもらいました。それまで経験していたグループ内でミーティングを維持するサービスとはずいぶん違った役割がありました。セミナーのプログラムを作成し、印刷し、北海道中のグループや主な関係機関に発送し、受付、部屋割り、当日のバーベキュー、会場設営、大人数を前にした司会進行、スピーカー等々を、仲間と協力してやることで、それまでの僕の貧困な社会生活からするとハードな挑戦の連続に感じました。

僕にとってそれほど負担にならないものから色々やらせてもらいましたが、なにか自分だけが大変だ、損をしている、他の人間は何もしない、という思いが付きまとい、仲間とトラブルがあるたびにやけっぱちになっていろんな仲間を恨んでいました。一方では何か大事なことに積極的に関わっている、仲間と一緒にやっているという充実感もありました。平行してミーティングで自分のこれまでの生き方、性格上の欠点がより深く、実感を伴って見えてきた気がします。ステップをやらせてもらったのが大きかったと思います。

サービス活動を経験することで、自分の時間や労力などを犠牲にして他の仲間に無償で与えるということをいやいやでもすることになります。仲間の中ではほかの場面で使う、違い探しなどによる言い訳があまり使えないということもあり、それで感じたのは僕はこれまでこうしたことをほとんどしてこなかったということと、いかに依存が強いか、そのくせ、いかに偉そうな思いや態度をしてきたかということを思い知らされました。自分ひとりでコピー一つとる時でも誰も何もしてくれないと腹を立てていましたが、いろんな場面（仕事とかでも）で腹を立てるのは自分の場合、大体が虫のいい思いをしたい勝手な依存だと気がつきました。仲間と一緒にやる中で傷つくこともありますが、飲んでいたときに傷ついた内容とはいくぶん違うものに感じました。一人の世界かそうでないかということかもしれません。その中で僕がこれまでいかに周りの人たちにいやな思いをさせてきたか、傷つけてきたかを実感させてもらいました。これはサービスからもらった最大の経験の一つだと思っています。僕にとって一番嫌な仲間から大きなものをもらったと思います。こうした経験が、親兄弟に心を開くことや、職場の人たちとの関係改善、自分の過去への納得といった変化のきっかけになりました。完全にではなくても恨みや疑いが晴れていき、解放されていくような体験で、これは大きな喜びです。

しばらくするうちに浦河のＡＡに転機が徐々に来まして、それはグループが二つになったことと、地元の病院との関係が変化して依存から離れざるを得なくなっていったことです。ホームグループ維持のため、少ない人数で常時役割をかけもちしなければならなくなりました。ひたすらコツコツやっていてもグループ内では勿論、病院関係者、地元で関わっている人たちは、当たり前ですが誰もほめたり励ましてはくれないということもはっきりしてきました。逆にそれ以前がぬるま湯環境というか、周りからの支援がありすぎ、本来ＡＡの役割などを考えなくてもいい状況だったと個人的には思います。各人がメンバーとしての自分を試されることになったのかもしれません。グループ内では一部で役割の押し付け（時にはニューカマーに対して）、このグループはメンバーともどもレベルが低いという内容の批判がより熱を帯び、ニューカマーはともすると古いメンバーの講話、処世術のようなものの聞き役になるといった様子でした。

僕にとっては何でＡＡグループをやっているのか、グループに何を求めているのか、何をもらってきたのか、ニューカマーとどう関わるのか、一見和気あいあいなのになぜ誰もつながらないのか等を考え直す機会になりました。ビジネスミーティングや病院メッセージに一緒に行く時に、古いメンバーにも本来ＡＡは何が大事なんだろうかという意見を自分なりに表明するようになり、ニューカマーに対してもたまにミーティング後に喫茶店に一緒に行って経験を分かち合ったり、自分にとってプログラムが決定的に大事だったという話をするようになりました。自分がしてもらった事を少しでもやることがＡＡを続けていくには必要なことだ、グループは地元の寄り合いではないという思いです。病院内でやっていたミーティング会場を町内会館に移すことを主張してそうさせてもらったり、地元セミナーでは恒例だった、一番最後にＡＡにとって一番お世話になった病院の先生（その思いは今でも変わりません）にお話いただくことをやめに（それまでもその先生の都合ではなくＡＡ側のお願いでお話いただいていました）することにもなりました。

こういう有言実行行動は一部で不興を買ったと思われ、それはミーティング中のちょっとしたつまらない圧力行為として出てくることもよくありました。経験上そういうことは長続きしないとわかっていたので、プレッシャーを感じつつもそのとき自分に出来ること～ミーティングで正直な自分の話をする努力～を続けることで収束して行きました。ＡＡミーティングではよく、言いっぱなし聞きっぱなしと言われますが、それはミーティング場は正直になるために無防備になる所なので安心、安全が不可欠なためだと思っています。しかし、この言いっぱなし聞きっぱなしの環境を悪用しようと思えばできるということを知ったうえで大事にしていくべきだと思います．無防備になっている時は一番傷つきやすい場面かもしれないからです。

僕は本々、ＡＡがどうだ、プログラムがどうだ、とか熱心そうなメンバーが嫌いで、できれば最小限の努力で最大の効果をあげればかっこいい、回復には理屈は必要ないと思いたかったしそういう仲間が都合が良く、一生懸命なのは病気が悪い証しといったような悪口をよく言っていました。でも一方で奥の方では、一生懸命ＡＡに入れあげている仲間が何か本物を持っているように感じ、どこかであれが本当なんだろうと思っていました。自分の中に残るのはそういう仲間の言葉でした。

こうした経験から、ＡＡの書籍やパンフレットに書いてあるＡＡが大事にすること、形式のようなものが本当に大事なんだと実感することが出来ました。グループでの苦労だけでなく、仲間から色々言葉で教えてもらっていたこと、書籍を使ってミーティングをしていた（伝統含む）ことなくしては、僕はただヘソを曲げていただけでしょう。地元の仲間だけでなく、幸い僕は北海道地域のサービスにも関わっていたので、そこでの関わりも大きな支えになりました。

昨年半ばくらいから浦河グループはミーティングの維持に関わるメンバーが二人になり、もうひとつの浦河うしおグループは、大分ましでもメンバーの減少傾向が続き、両グループ協議の結果、２００５年から一緒になろうということになりました。浦河グループの方を解散という形にしました。メンバー数ギリギリのグループが二つよりも、もう少し力のあるグループ一つのほうがいいということです。せっかくガンバって維持してきたグループがなくなるのは、努力が無に帰した気もしますが、自分の勝手な思いのためにグループがあるのではなく、新しく来る仲間のためにより機能するグループがあるほうが大事だと思いました。今は変なプレッシャーから大分解放されて安心しました。やはり負担を分かち合って信頼と安心があるほうがいいですね。

最後になりますが、僕が知る限りＡＡはともするとただアル中が集まって自分の話をしている、というだけの認識になりがちで、僕も昔はそれでいいんじやないかと思ってたんですが、では他の機関でやってる集団療法とかとどう違うのか、使っている書籍が違うだけなのか、ということになります。それだとＡＡは必ずしも必要ないと思います。もし他の機関にそういうのがＡＡという認識が定着してしまうと、単なる外部の集団療法とかミーティングという感じになってしまい、自立した社会資源になっていく方向から遠ざかっていく気がします。ＡＡメンバー、イコールなんか知らないけど偉そうになってしまった患者、というのでは、いくらメッセージだ広報だと一生懸命やっても結果につながらないのではと思います。勿論僕の周辺でも、地域とかグループ、個人単位の努力はしていくべきですが、ＡＡが全体として市民権をもっと得られるようになっていけば、方々の努力がより報われるのではないかと思います。僕個人としては、根拠もなく何となくで恐縮ですが、ビッグブックとか１２＆１２とかが一般の書店に並ぶまでは難しい気がしています。
どうもありがとうございました。

サービスとの関わりの中で

北海道・北杜G　　七絵

朝、夜の区別もつかない連続飲酒の中、こんなことが世の中にある訳がないと思いながらも、どうすることも出来ず、主人に精神病院に連れて行って貰った。入院生活の中で、院内からミーティングに通う仲間よりＡＡのことを知る。どんな所なのかと思いながらも退院したら飲んでしまうのではないかとの不安がＡＡに行ってみようと思う気持ちになった。そして毎日ミーティングに通い続けた。行けば酒が止まる、それだけの思いで歩き始めてから、グループに入った頃、ビジネスミーティングの中で少しずつＡＡのことが分かり始めて来た。当時の北海道ではオフィスがなく、インターグループから地域委員会が発足、地域集会が初めて開催された。新しい何かが始まるのかなぁと酔いの醒めない頭で思ったものだ。仲間は意欲的だった。地域委員会に我こそはと集まり、支配力・名声・ライバル意識などいろんな思いがあるように感じられかなり迫力があり怖い思いや、これから何が起こるんだろうと不安な気持ちが一杯だった。しかし、私の思う（殴り合い）ようなことは起こらず、話し合いが終わると普通に話す仲間をみて不思議な感覚になったものである。

飲まないで２年にほど経った頃、グループの仲間から誘われ地域委員会に参加することになった。グループの中にサービスに関わるメンバーも多く、不安は感じなかったと言うより何も判らなかったので軽い気持ちで引き受けた。やがてこれが私に取って、飲まないで生きることの大きな原動力になっていった。以前に事務の仕事をしてきたこともあって財務・会計の役割についた。なんだ、こんな簡単な家計簿を付けるようなもんじゃない（当時全道のグループの献金の額が？万円）と、そんな自惚れの気持ちがいつか大きく崩れてしまった。何度たたいても違う答えが出てくる計算機、何度数えても違う献金額、郵便局へ行けば印盤を忘れ、何をしに来たのかと苛立つ感情、何度投げ出してしまいたかったことだろうか。そんな経験の中でサービスをすることは１２ステップの実践をすることなのだと思えるようになって、ＡＡの為とかグループ、仲間の為とかより、自分に与えられることの方が大きいことに驚いた。

私が委員会の中で悪戦苦闘してている時、ふと回りを見回すと、あんなに意欲的にサービスに関わっていた仲間が一人減り、二人減り、最後には三人になってしまった。次ぎの委員長の候補者も委員もいない。何が起ころうとしているのか最悪の状態を避けることもできず、北海道地域委員会は全道集会で凍結することを決議した。それでもサービスは細々ながら、全国評議会へ評議員の参加、地域集会の開催、札幌地区開催のラウンドアップなど火を絶やすことはなかった。3年間の凍結の中、セントラルオフィス設立の具体的な話し合いがあり、オフィス設立準備委員会が立ち上がり、北海道地域はオフィスの開始と共に新たなサービス活動が始まった。

私は最後まで一緒に地域委員会でやってきた仲間からの“もう一度、一緒にやろうよ”との言葉で再び地域のサービス活動に参加させてもらうことにした。

セントラルオフィスが開設されたことで地域のサービス活動の範囲は広くなり、関係機関への広報活動は以前とは比較にならないくらい行動しやすいものになった。しかし、いくらＡＡが知られるようになっても、メッセージに参加するメンバー、アルコホーリクを受け入れるグループ（ミーティング会場）の協力がなくてはならないと思う。

私はいつも、自分の能力のないことを知られるのを恐れていた。でも神様はその人に見合った役割を与えてくれる。私にできることはサービスを通してそれをお返しすることで、与えられたものの大きさは計り知れない。

いつもそばにいて助けてくれる仲間、毎年の全国サービスフォーラムで出会う仲間、何百人の人との関わりが飲まないで生きる喜び、楽しさ、そしてＡＡの原理を伝えてくれたことだろうか。

最後に、かってどうしょうもなかったアルコホーリクを妻に持つ、主人に感謝したいと思う。心から「ありがとう」を贈る。

サービスと私

北海道　S

1.私のソブラエティはサービスとの関わりの中で与えられてきた部分が大変に多いと思う。初めの頃は特にその感が強い。1年過ぎた頃グループの会計を引き受けた時のこと、各ミーティング会場から献金が集まってくる。まとめてお金を広げるとやたら５００円コインが目について少々なら頂いても分からないのでは?と考えると数える手が止まった。・・・・その時実に不思議な感じに襲われた。飲まなくなっても、つい何ヶ月前にはまだ自転車を盗ったり、百円の店で品物を盗ったりしていたことを話している私にこんな大金？を当たり前のように預ける仲間達。変だなァと思う同時に、グループの仲間に丸ごと受け入れられている自分を感じ、言いようのない安らぎと安心の中で全身から力が抜け、泣いていた。

2.グループ以外の役割では、最初に地域集会の書記を同じくらいのソーバーの仲間三人でやることになった。報告書をまとめることになって一人の仲間の部屋に三人集まったが、その仲間が焼き鳥を出してくれた。自分で串を肉に一本一本刺したのを魚焼器で焼いてくれた。私は「自分が何か他の人の役に立つことをしているんだ」という意識があって嬉しくなっていた。他の二人も同じ想いがきっとあったと思う。その時の仲間とは、今でも特に親しくしている。書記(地域集会の)は二回続けてやらせてもらったが、おかげで地域サービスの仕組みが解り、自分のグループ以外のグループにも関心を持てるようになった。

3.その後地区委員の頃。地区委員会の中で「言った」、「言わない」の話になり、「お前今言ったんでないか。この野郎!」と、私は怒鳴ってしまい、委員会はメチャクチャになった。帰ると司会をしていた先行く仲間から電話があり、「少々抑えてもらわないとー」と静かに言われた。そんなことがあった後も仲間達は今まで通り普通に接してくれた。それ以降も感情が病的に激するのは度々だったが、あのときを思い出すことで少しは抑えられるようになっていった。

4.代議員は輪番(順番？)としては引き受けるべき立場になってもなかなか受けなかった。ある先行く仲間が「代議員はステップ４、５を終わったメンバーがやる役割」といっているから、が私の言い分。以前に少し4を少し書いたが「俺がやるからには完全な大作を」と考えて行き詰まってしまい、「４，５やったって飲むやつは飲んでいる」とか言っていた。ソーバー５，６年頃、４も５もやらないまま代議員の２年を過ごした。私たちの地域では、一時期地域サービス活動を凍結した期間があり、凍結にからんでオフィスのための積立金を(当分オフィス設立の見込みがないので)どうするかが集会の議題になった。私は「ＡＡは動かないお金は出来るだけ少額に止めるべきで使う目的がはるか遠いと思われるこのお金は全額ＪＳＯに献金すべき」の意見だった。一度はその通りに採決されたが、長く地域サービスに係わってきた仲間が、凍結解除の希望と今まで積み立ててきた仲間達の心情を述べて再採決。どんでん返しの決定で地域が持ち続けることになった。「一度採決されたものを何だ!」と私の中では尾を引いたが、後のＨＣＯ(全国で最後に設立されたセントラルオフィス)の立ち上げは、あの積立金が無ければ相当厄介なことだったと今は思う。表面上の正論を主張する危うさをこの一件は教えてくれた。

5.地域サービスの凍結解除に当たり、セントラルオフィスの設立を急ぐことの重要性が地域の共通の認識となった。(今思うとセントラルオフィスの業務(役割)に対してはかなり考え違いをしていた)。「オフィス設立委員会」が設けられ、私は立候補し、委員長に選出された。

過去２年間程の私たちの地域全体のＪＳＯ献金等からＨＣＯに回ると予想される献金合計を割り出してみたが、その他の収入を見込んでも全く月々のオフィス運営には足りないことが解った。委員会では当初からある方針を決めていて「こういう理由で無理」ではなく「こうすれば設立可能」の結論を出すことにしていた。伝統に対しても、両目をつぶる訳にはいかないが，片目ならつぶることにした。献金不足は、申告してもらった特定のメンバーによる毎月の定額献金(寄付？)で補うことで集会に計られたが、集会では「各グループが不足分も献金頑張っていこう」と熱く決議されて一件落着となった。その間伝統と現状の問題「単なる善は最善の敵」の解釈なども分かち合う機会があり、理想と現実のすり合わせの重要性も改めて学んだ。

6.地域サービスの凍結解除後の相当期間、地域委員会は部門的には財務(会計)と広報(書記)の二部門しかなく広報も人員の関係もあり、委員会の書記とか文書での関係者と仲間へのお知らせ程度であったため、メッセージ(サービス)部門を設けることになり、その役割も引き受けることになった。(２年間)。自分が適任とは思わなかったが、ともかく必要な部門を地域に開くことこそ大事と考えた。関係者の方とも会う機会も増え面白い体験もあった反面自分の対人恐怖的な部分にも改めて向き合うことになり、一つ自分の課題が見えてよかった。

7.評議員に推された時、困ったことが起こった。「ステップ４、５をやっていないのでは恥ずかしくて地域の評議員として送り出せないよ」という声がちらほら聞こえてきた。評議員の資格云々がどうであるかは別にして、私ももっともと思うし納得して４を新たに書き５のもう一人の人はスポンサーにお願いした。私は実に１１年のソーバーの後に初めてステップ４、５の経験をやっとすることができた。このことは仲間からの貴重な贈りものだと思っている。

「俺はステップレスＡＡグループを近々立ち上げるぞ」とか、冗談にしろ臆面もなくいうようになって、結果として苦しくなっていた。評議会に行った時、雑談の中でこの話をしたら、ある女性の仲間が「よく飲まなかったわね」といってくれた。その係わりの内容やその良し悪しは別にして、ともかく何とかサービスに係わり続けさせてもらったことで、私は仲間から離れずに来られたんだと思う。ただ感謝である。

ＡＡの三角形の三辺、〈回復、一体性、サービス〉はそれぞれが独立したものではなく、互いに影響し合う関係にあったことで、私は助けらてきた。

今までの私にとって、サービスとは何かを振り返ると、「飲まないで生きている自分を確認する行為であり実感できる場所」とでもいうのだろうか。

全体サービス、制度改革小委員会設置にともなう、委員の募集について

企画・評議会担当常任理事　森田

2月11日から13日にかけて、川崎市で第10回AA日本全国評議会が開催されました。三日間にわたる会期の中でたくさんの議題が審議されましたが、時間の制約もあり、残念ながら未審議のままの議題が多数残りました。

未審議議題はいずれも議事委員会取扱の予定だった、全体サービス機構の制度改革に関するものです。評議会最終日の全体会議の中で、これらの議題について小委員会を立ち上げ、委員を募集し、次回の全国評議会に向けて地域の意見を取り入れ再検討することが勧告されました。

つきましては、勧告事項に従い、ここに小委員会メンバーを全国公募したいと考えます。下記事項を確認の上、応募いただきたいと思います。

記

1．趣　　旨　全体サービス　制度改革小委員会　委員募集
2．位置づけ　常任理事会付　企画・議事委員会小委員会
3．募集人員　若干名
4．目　　的　第10回AA日本全国評議会議事委員会分科会での、制度改革案をはじめとする未審議事項などの検討
5．委員任期　募集受理より、第11回AA日本全国評議会議題締切日(2005年9月上旬)まで
6．応募方法　別紙応募用紙を用い、郵送またはFAXでJSOに申し込んでください。各グループに配布してありますが、
JSOに応募用紙は用意してあります
申し込み宛先
〒171-0014　東京都豊島区池袋4-17-10土屋ビル４Ｆ
ＡＡ日本ゼネラルサービス(JSO)　TEL　03-3590-5377
FAX　03-3590-5419
7．応募締切　2005年3月22日(火)
8．予　　算　補正予算として5万円を評議会にて承認

日程概要

2月　委員募集告知
3月　委員受付終了
4月　小委員会をJSOにて開催
作業工程などを打ち合わせ　実務に入る
5月～7月　～この間、E-mail・郵便・FAXなどで、随時打ち合わせ～
8月　小委員会をJSOにて開催　最終検討・調整
9月　議題締切日に合わせて、答申を評議会事務局に提出

ミーティング出席のための交通費について

評議会の議題に何回か上がり、それぞれのグループの良心に委ねることとしてきた福祉事務所へのミーティング出席証明について、そして、しばしば聞こえてくる不正申告のうわさなど、ＡＡは外部に対して意見を持つものではないが、これからＡＡを必要とする人たちのためにメンバーの皆さまにもう一度考えていただければ幸いである。

草創期のころ、ＡＡミーティングに参加する交通費の援助を受けた中間施設から奇跡的に一人の回復者が出現し、これに数人が続いた。これを機に横浜の中福祉事務所の担当者、ノンアルコホーリクの協力者、アルコホーリクの３人が熱心に福祉事務所に働きかけていただいたことで移送費の受給が可能になった。しかし、ミーティング参加の証明が必要となったことはご存知の通りである。ＡＡはこのような証明は行わないが、ミーティングを開いているグループの良心として押印やサインをして、それぞれの回復の手助けをしてきた。そして、これが全国的に広がっていったのである。ＡＡミーティングがアルコール依存症からの回復に役立つことが関係機関、関係者に理解されてきていることはうれしいことである。この恩恵は未だ苦しんでいるアルコホーリクが、これから先に回復のプロセスのなかで必要となるはずである。正直になるプログラムであるからこそ回復が可能なのだと思う。時折聞く不正な申告は将来に渡って受けられるはずの恩恵を危うくしてしまうのではないだろうか。自分たちの回復はこれからＡＡにやって来る人にかかっていることを忘れないようにしたい。　ＪＳＯ

ソフトカバー版　『ＡＡ成年に達する』

６月半ばころ完成の予定です。頒布価格は未定。

ＡＡが誕生20年を迎えた1955年、アメリカのセントルイスで開催されたコンベンションの記録をビル・Ｗが編集した、ＡＡの20年の歴史。ＡＡメンバー必読の書です。

「あらゆる情報をはばむ障壁であり、あらゆる論争の反証となり、そして人間を永遠に無知にとどめておく力をもった原理がある。それは、調べもしないで頭から軽蔑することである」（ハーバート・スペンサー。ビッグブック280ページより）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ＡＡ共同創始者ドクター・ボブの伝記

『ドクター・ボブとグッドオールドタイマーズ』

は、8月中の完成を目指して、現在鋭意準備中です。

以下は病床に伏し、自らの最期を悟っているドクター・ボブが、付き添いのアン（ＡＡメンバー）と交わした問答。この直後にビルが来訪し、ふたりはＡＡ評議会の召集に合意する。最終章からの引用です。

「アン、飛行場で飛行機が離陸するのを見たことがあるかね？」とドクター・ボブは言った。

「何度もです」と彼女は答えた。

「飛行機はしばらく見えているが、やがて見えなくなる」と彼は言った。「見えなくなっても、バラバラになったり、消えてしまったりするわけではない。飛行機は新しい地平線に向かうだけだ。それがわたしの死の感じ方だ。わたしは新しい地平線を見つけるだろう」

ドクター・ボブが他界する前に、彼には果たすべきＡＡの仕事がひとつ残されていた。それは評議会という提案——ある意味で、何千ものＡＡメンバーたちと未来のメンバーたちに贈る彼とビルの遺産——にかかわることだった。

出版局

編集・発行：ＮＰＯ法人　ＡＡ日本ゼネラルサービス（ＪＳＯ）〒171-0014東京都豊島区池袋4-17-10土屋ビル４Ｆ
TEL:03-3590-5377　FAX:03-3590-5419 ホームページ：http://www.aajapan.org